

【研究ノート】

近代中国における医学者の 海外留学と帰国後の活動 —「中華民國医界名士録」を素材として

見 城 悌 治

はじめに

近代日本で学んでいた中国人留学生の研究が近年活発になってきている⁽¹⁾。筆者もこれまでいくつかの論考を発表してきたが、そのなかで、医学薬学を学んだ中国人学生の帰国後の動向の検討も行ってきた⁽²⁾。

近代日本で学んでいたアジアからの医薬留学生、とりわけ中国人留学生支援を積極的に行っていた団体に同仁会があった。1902年に設立された同会は、「清韓其他亜細亞諸国に医学薬学およびこれに随伴する技術を普及せしめ、かつ彼我人民の健康を保護し、病苦を救済するにあり」を会の「目的」に掲げ、「清韓其他亜細亞諸国に対し、医学学校薬学校・医院および薬局の設立」をすること、「留学生および薬学生の留学を勧誘し、かつその留学生を保護し、修業の便を与える」⁽³⁾事業などを行なうことを標榜していた。つまり、「近代化」に先んじた日本が、周辺アジア諸国に西洋から学んだ医学・薬学を普及し、また中国への病院建設による医療施与活動などをするを目的としていた団体であった。しかし、日中戦争期には軍部に追随したため、敗戦後は解散を命じられることになる⁽⁴⁾。

さて、同仁会は、啓蒙的活動にも意を払っていたためか、定期刊行物を発行している。1906年に最初の雑誌発刊をして以来、休止や名称変更などが複数回あったが、すべて示すと次のようになる。『同仁』（第1次：1906年6月～1916年11月）、『同仁』（第2次：1922年3月～1924年12月）、『同仁』（第3次：1927年5月～1938年5月）、『同仁会医学雑誌』（のち『同仁医学』。この2つはすべて中国語による：1928年6月～1938年5月）、さらに『同仁

会報』(1940年8月～1944年9月)も発行している⁽⁵⁾。

このうちの中国語版『同仁会医学雑誌』の1929年7月号から1930年10月号まで、16回にわたり、「中華民国医界名士録」(以下、「名士録」と省略する)と題し、医学者・医師を紹介する記事が連載されている。全部で106名が紹介されるなか、日本留学経験者は50名が含まれていた。その氏名や在籍校などの紹介は既にされている⁽⁶⁾が、106名全体について整理し、同時代の同仁会が、あるいは中華民国の医学界がこの企画において、どのような人物を取り上げたのかについては不明なままである。そこで、本稿は、この「名士録」に掲載されていた情報全体をまとめ、その特色を検討していくことを目的としたい。

なお、これらの連載記事は、満州事変が勃発する直前の1930年までに、すなわちある意味で「友好」的な時代にまとめられたものであった。しかし、この後、日本が中国へ兵を進める十五年戦争に突入していくため、これら「名士」たちのその後の動静、あるいはまた1949年に中華人民共和国が誕生した後の「評価の行方」は気になるところである。それを考察するため、本稿では、2000年前後に中国で発刊された4つの人名辞典類(のちに詳述)の叙述や評価とも照らし考察していくこととする。

1 「中華民国医界名士録」に挙げられた医学者たち

1) 「名士」106名のすがた

この連載が始まった1920年代末に、そもそも中国国内に何名の医師がいたのだろうか。『同仁会医学雑誌』第三巻第一号(1930年1月)に「中華全国医師調査 民国十八年(1929年)12月現在(北平・金子直先生特訊)」という記事が載っている。そこには「1928年に「医師暫行条例」が公布され、「医師領証」の発給をすることになり、1,400名が申請したが、合格したのは800名に過ぎなかった。その資格者は国内外の官立あるいは公私立医学専門学校以上の卒業生としたが、条件が厳しすぎたようである。よって、条例の改正を考えている。一方で、現在、国内の正式な医学校を卒業した医師は4,000名に満たない。外国の医学校卒業者は1,000名もいない。よって、

正式な医師の数は、5,000名前後であろう。また民国の医学校は、1883年に創設された天津海軍医学校から、1926年創設の満州医科大学まで24校を数える。これら24校の卒業生は、1929年までで3,816名に上る（p60）」云々とあった。

もう少し丁寧な説明が欲しい記事ではあるが、ともかくもこの時期の全国の医師は5,000名前後であったようだ（なお、ここで言う「医師」とは西洋医学を習得した人であり、中医学（漢方医学）の医師は含んでいない）。

さて、「名士録」の第一回連載が始まった同じ号（1929年7月）には、「本誌の一大革新」の目玉とされた「中国^(ママ)医界名士録」について、以下のよう
な説明がある（原文の中国語を筆者が訳した）。

中国四百余州。医界名士は少なくない。編者にとって惜しむべきことだが、僻处遠地については広く知ることができず、遺憾ながら漏れている情報もあるだろう。そこで読者に教えを乞うので、ぜひご投稿を賜りたい。掲載したいのは、下記の条件に合った人である。

- 1 いわゆる医界名士とは、医術（学究・開業医を含む）、医政、医育の諸範囲を論ぜず、医学上、社会上あるいは政治上有名な者である。
- 2 投稿の際、明記すべきは、本名、雅号あるいは字、籍貫、住所、年齢、略歴（出身学校および経歴）である。学位をもつ者はそれを出所と年号とともに必ず示すこと。もしも写真があればさらに良い。
- 3 事実無根の場合は、採用しない。

一つ目が最重要項目で、医学に関連するあらゆる分野の人士を対象にするものの、「有名な者」であることが条件とされていたようだ。最終的には106名が掲載されることになるが、その判断は、編集部に委ねられたものと思われる（訳あって不掲載とされた人がいたのかは、もはや測りがたい）。

よって、ともかくも選ばれた人が、「同仁会が見た『医界名士』」であるとみるほかないだろう。

この連載は、基本的に、各名士ごとに、名前、字、出身、現任、学歴、留学先、経歴、その他の順で掲載されているので、それを一覧表にしたものを

掲げることにする。名士を一覧にする際に、たとえば「国別」などで示す形が分かりやすいということも考えられるが、雑誌に掲載された順番通りとした。一方で、日本留学経験者については、ただちに判別がつかうように、灰色を付した。

表 「中華民国医界名士録」に掲載された人たち（網掛けは「日本」留学者）

	名前	字	出身	現任	学歴	留学先	経歴	掲載年次
1	劉瑞恒	月如	河北省天津	国民政府衛生部常務部長	天津北洋大学畢、米 国 ハーバード 畢、医 学 博 士 (1915)	アメリカ	ハーバード医学校助手、上海紅十字会總病院医員、北京協和医学校助教授、医科部長	1929年 7月
2	嚴智鍾	季約	河北省天津	国民政府衛生部医政部司長	東京帝大医学部畢 (1915)	日本	東京帝大伝染病研究所嘱託、国立北京大学専門学校学校長、内務部中央防疫処副處長、北京伝染病研究所所長、北京首善医院副院長、東方文化事業上海委員会委員 (1925年8月)	1929年 7月
3	金宝善	楚修	浙江省紹興	国民政府衛生部保健司長	千葉医科大学畢業 (1918)	日本	北京中央防疫処技師	1929年 7月
4	陳方之	芳芝	浙江省鄞県	国民政府衛生部技監、中央衛生試験所所長	東京帝大医学部畢 (1917)、同 医 学 博士。	日本	帰国後、蒋介石と知り合い、国民革命軍總司令部軍医少尉となる。南京軍医処処長、署内政部衛生司司長 (1928)。	1929年 7月
5	全紹清	希伯	河北省宛平県	天津特別市衛生局長	天津北洋大学畢、アメリカ・ジョンボプキンス大学、ハーバード大学留学、医 学 博 士 (1912)。	アメリカ	北洋医学校教授 (1907)、東三省ベスト防疫委員 (1910)、陸軍軍医監、陸軍軍医学校校長 (1914)、教育部次長 (1922)、青島衛生局長 (1924)、北京紅十字病院監事 (1926)。	1929年 7月
6	伍連德	星聯	広東省台山県	国民政府軍政部陸軍署軍医司長	英国ケンブリッジ大学畢 (同文学士、医学博士)、香港大学法律士、上海聖約翰 (セントジョーンズ) 大学博士、東京帝大医学博士。	イギリス、日本	北洋医学校校長、營口海口檢疫医院院長、北京中央医院長、中華医学会会長、東方文化事業上海分会委員、大總統府侍從医官、第一回中日交換教授 (1923：九州帝大、京都帝大、東京帝大講演)。	1929年 8月
7	胡鴻基		江蘇省無錫	上海特別市衛生局長	北京国立医学専門学校畢。アメリカ・ジョンボプキンス大学公共衛生学博士。	アメリカ	アメリカ・テネシー州衛生部行政官、青島普濟医院主任委員、松瀨埠衛生病局局長	1929年 8月
8	刁信德		広東省	聖路加医院上席医師	上海聖約翰 (セントジョーンズ) 大学博士、ペンシルバニア大学、リバプール大学畢、衛生学博士。	アメリカ、イギリス	中華医学会会長、民国医学雑誌記者	1929年 8月

近代中国における医学者の海外留学と帰国後の活動

	名前	字	出身	現任	学歴	留学先	経歴	掲載年次
9	牛惠霖		江蘇省	上海中国紅十字会 総医院長、上海山東 路病院顧問医、 衛生教育執行委員 会会長、上海聖約 翰（セントジョー ンズ）大学教授兼 校医。	上海聖約翰（セン トジョーンズ）大 学畢、ケンブリッ ジ大学およびロン ドン病院留學生 （医学博士）。英国 王立医師会委員。	イギリス	中華医学会会長、同上海分 会会長。	1929年 8月
10	牛惠生		江蘇省 上海県	上海医学協会会長	上海聖約翰（セン トジョーンズ）大 学 文 学 碩 士 （1919）、アメリ カハーバード大学 医学博士（1914）。	アメリカ	上海ハーバード医学校教授 （1915）、アメリカハ ーバード大学医学校細菌学教 授、アメリカジョンボプキ ンス病院整形外科助手 （1918）、北京医学専門学 校整形外科主任（1920）、 北京医学協会秘書、国立医 学協会書記（1921）。	1929年 9月
11	王福源	注東	山東省		上海同済大学医科 畢、ドイツベルリ ン大学畢（医学博 士）	ドイツ	済南中西医院院長、青島膠 澳増督辦署総医官、青島普 濟病院院長	1929年 9月
12	江聖鈞	秉甫	浙江省 奉化県	杭州龍興路（開業）	大阪医科大学畢 （1916）、ベルリ ン大学医学博士	日本、 ドイツ	浙江伝染病院院長、浙江省 立医薬専門学校教授（1923）	1929年 9月
13	石増栄	欣叔	奉天省 遼陽県	長春長鉄路総医院 院長	奉天南満学堂畢 （1923）、京都帝 大医学部畢（1922） 医学博士	日本	未詳	1929年 9月
14	余霖	雲煥 ・ 維章	浙江省 鎮海	国民政府陸軍軍医監	九州帝大医学部畢 （1922）、医学博 士	日本	九州帝大附属医院後藤外科 副手、国民革命軍軍医官 （1927）、南京鼓楼医院外 科部長（1928）、同城南医 院委員（1928）。	1929年 9月
15	阮尚介	介藩	江蘇省 奉賢県		ドイツ医学博士 （留学先未詳）	ドイツ	陸軍総長顧問兼北京大学教 授（1915）、上海同済大学 校長（1917）	1929年 9月
16	周威	仲奇	江蘇省 江寧県	南京中央大学校医	金澤医学専門学校 （1909）、ドイツ 医学博士（留学先 未詳）	日本、 ドイツ	南京特別市衛生局長（1927）	1929年 9月
17	張任華	作輝	広西省 玉山县	青島市衛生局長	長崎医学専門学校 （1919）	日本	広東大本営陸軍第四医院長	1929年 9月
18	呉済時	谷宜	江蘇省 宜興県	蘇州公園路9号 （開業）	京都府立医大 （1912）、ドイツ ベルリン大学医学 博士	日本、 ドイツ	南京江蘇省立医院医長	1929年 9月
19	施賛元	君翼	江蘇省 呉県		上海聖約翰（セン トジョーンズ）大 学畢、ワシントン 中央高等学校留学 （1904）、ワシ ントン大学畢、医学 博士（1914）	アメリカ	上海聖約翰（セントジョー ンズ）大学付属病院医員 （1914）、ワシントンコロ ンビア婦人科医院医師 （1915）	1929年 9月

	名前	字	出身	現任	学歴	留学先	経歴	掲載年次
20	侯宗濂	讀泉	奉天省 海城県	北京協和医学校教授	奉天南満医学堂畢 (1920)、京都帝 大医学部・医学博 士(1928)	日本	京都帝大附属医院助手、満 州医科大学生理学助教	1929年 9月
21	夏禹鼎	子和	浙江省 奉化県	ドイツ留学中	九州帝大医学部 (1922)、東京帝 大大学院研究医学 博士(出所未詳)	日本、 ドイツ	寧波第一公立医院医師・南 京挑家巷城南医院医師	1929年 9月
22	葉毅	渭南	広西省 融県	上海(開業)	岡山医学専門学校 (1916)、ドイツ 留学、医学博士 (出所未詳)	日本、 ドイツ	粵桂聯軍医院院長(1921)	1929年 9月
23	湯爾和	爾和	浙江省 杭州	北平大学生物学教授	金沢医学専門学校 畢(1910)、日本 医学博士(1929年 6月4日)	日本	第一革命後在南京各省代表 会議議長兼浙江省代表、国立 北京医学専門学校長 (1921)、王寵惠内閣教育 総長(1922)、東京大震災 時为中国紅十字会慰問使 (1923)、顧維鈞内閣内務 総長(1926)、財政総長 (1927)、塩務署長兼稽核 総所総辦(1927)、海関付 加税保管委員会委員(1927)	1929年 10月
24	謝元甫		広東省 中山県	北平協和医学校泌 尿科医	武昌文華大学畢医学 碩士(1910)、 上海聖約翰(セント ジョーンズ)大 学畢、上海中国 ハーバード大学畢 医学博士。	アメリカ	ハーバード医学研究院研究 (1927)、ブルックリン大 学病院泌尿科医、ニュー ヨーク麦爾譚病院医師 (1919)、北京協和医学校 助手(1920)、北京陸軍部 顧問医、西北辺防軍顧問 医、北京病院院長(1927)	1929年 10月
25	劉曜曦	晋五	奉天省 遼陽県	満州医科大学助教 授兼遼寧医専教授	満州医科大学畢 (1922)、京都帝 大医学部研究 (1928)、医学博 士(1929)	日本	満州医科大学講師(1923)、 民国医学雑誌編集(1923)	1929年 10月
26	梁伯強		広東省 梅県	上海同济大学医科 病理学助教	上海同济大学医科 畢(1922)、ドイ ツミュンヘン大学 医学博士	ドイツ		1929年 10月
27	閻德潤	東里	奉天省 海城県	満州医科大学教授、 民国医学雑誌 編集	満州医科大学畢 (1923)、東北帝 大研究、同医学博 士(1929)	日本		1929年 10月
28	朱其輝	内光	浙江省 紹興	浙江医業専門学校長	千葉医専畢 (1914)、ドイツ ベルリン大学医学 博士(1920)	日本、 ドイツ	南京第八師軍医長、北京医 科大学内科主任(1917-25)	1929年 10月
29	金子直	子直	浙江省 東陽県	国民政府衛生部科長	千葉医専畢 (1914)、早稲田 大学得業士(1904)	日本	南通医科大学教務長 (1913)、教育部全国医学 校学生成績審査会主任、国 際連盟中国秘書(1927)、 高等警官学校法医学教授、 国際連盟派赴英国印度研究 衛生之中国代表。	1929年 10月

近代中国における医学者の海外留学と帰国後の活動

	名前	字	出身	現任	学歴	留学先	経歴	掲載年次
30	侯毓汶	希民	江蘇省無錫	天津特別市衛生局課長	千葉医専畢(1908)	日本	北洋医学校教授、南京陸軍医学校校長、北満ベスト防疫官、中華医薬学会会長、中央防疫処科長、中央衛生委員会委員、民国医学雑誌主幹、北京医師会会長。	1929年10月
31	馮啓重	[女図]	江蘇省武進県	南通医科大学教授兼附属医院産婦人科主任	東京女子医学専門学校畢(1918)	日本	南京市立第一医院産婦人科医師、北京香山医院産婦人科医師、天津啓重医院院長、江蘇省立産科講習所長	1929年10月
32	徐誦明	献遊	浙江省新昌県	国立北平大学医学院院長兼病理学主任教授	九州帝大医学部畢(1918)	日本	国立北平大学医科教授、同教務長(1925)、南京軍医処副処長(1926)、南京鼓楼医院院長(1926)	1929年10月
33	郭昌錦	蜀江	湖南省麻陽県	国民政府第一陸軍医院院長、南京陸軍軍医同学總會主席	天津陸軍軍医学校畢(1918)	中国	西北第卅使署兼西北边防總司令部医官(1919)、湖南陸軍第一師防疫所長(1922)、同軍医処長兼衛戍医院院長(1924)、同兼理參謀長秘書長事宜(1925)、国民革命軍獨立第二師軍医科長兼野戰医院院長(1927)、同第40軍軍医科長兼後方医院院長(1927)、国民政府軍事委員会及軍医監察委員会主席(1927)、国民革命軍第40軍特別党部常務委員(1928)、同第三軍団總指揮部軍医科長(1928)。	1929年11月
34	程瀚章	念劬	江蘇省呉江県	上海商務印書館医学編集、上海医師公会執行委員、「新医与社会」編集主任	江蘇医学専門学校畢	中国	北京協和医院医師、北京女高師医科教授、国立中央大学上海中学校医、江蘇教育庁医科督学。	1929年11月
35	孫克錦		浙江省鄞県	上海市公安局医官、大華産科学学校教授、輪船招商局總管理処医師、船海専科学学校医	国立同済大学医科畢	中国	ドイツ実隆医院主任、松瀨防守司令部医官、松瀨警察庁医官、上海禁烟局医師	1929年11月
36	褚民誼		浙江省	国民党中央執行委員会委員、医業評論編輯集総主任、東南医科大学上海女子医学専門学校主席校医董	(日本大学法学科)、浙江省立法政学校畢、パリ医学校畢	フランス(日本)	浙江省議会議員、広東政府中央執行委員、中央特別委員会候補委員(1927)、中央党部商民委員(1927)、国民政府監察院委員、上海中法大学校長	1929年11月
37	胡定安		浙江省呉江県	南京特別市衛生局長	浙江省立医業専門学校畢(1919)、浙江省派ドイツ留学生(1922)、ベルリン大学医学博士、プロシア公衆衛生学院畢。	ドイツ	浙江病院内科医院(1919)、上海商務館編訳処医務股員、開業(上海南京路大慶路、1927)、社会医報創刊(1927)、南京特別市政府衛生処長	1929年11月
38	楊曉嵐	小蘭	湖北省鐘祥県	南京特別市衛生試験所長(1929)、兼衛生局技術科長(東京留学)	東北帝大医学部畢(1915)、東京伝染病研究所研究(1928)	日本	浙江省立医業専門学校教授(1917)、兼広済医学堂講師、江蘇省立医専講師。	1929年11月

	名前	字	出身	現任	学歴	留学先	経歴	掲載年次
39	黄子方	子方	福建省	国民政府衛生部参議 (1929)	アメリカコロンビア大学畢	アメリカ	北京中央防疫処医師、漢口特別市衛生局長 (1917)、北平特別市衛生局長 (1928)	1929年11月
40	厲家福	綏之	浙江省杭県	杭州市比勝廟巷口開業	金沢医学専門学校畢 (1908)	日本	浙江第六師衛戍病院長兼軍医部長 (1916)、浙江陸軍医院長、杭州医師会長、浙江病院副院長兼内科医長	1929年11月
41	盛在珩	佩葱	浙江省鎮海県	浙江病院長兼浙江省立医薬専門学校教授	大阪高等医学校畢 (1914)	日本	浙江省議会議員	1929年11月
42	何熾昌		広東省番禺県	広州市衛生局長、広東光華医科大学衛生学教授	広州中法医院畢、フランスリヨン大学博士、パリ熱帯病院専科畢	フランス	リオン聖保定医院医生	1929年12月
43	洪式岡	百容	浙江省樂清県	杭州医院院長、杭州熱帯病研究所長	北京国立医科大学畢 (1917)。ドイツ留学 (1920～23)。	ドイツ	北京協和医院医員、北京国立医科大学教授、同校長 (1923)、教育部派欧米調査医学 (1925)、杭州広済医院院長 (1927)	1929年12月
44	汪尊美	企張	江蘇省上海県	上海民国路及四川路開業、診療医報編集主任	大阪高等医学校畢 (1915)	日本	浙江省立医薬専門学校教授、上海華美大薬房顧問	1929年12月
45	汪桐美	于岡	江蘇省上海県	上海西門外林蔭路開業	大阪高等医学校畢 (1916)	日本	浙江省立医薬専門学校教授、校長 (1922)、同医院長、(尊美氏と弟洪美氏三人はみな日本留学者)	1929年12月
46	葉秉衡	漢丞	江蘇省南匯県	上海五洲固本造膜廠長	長崎医専畢 (1911)	日本	江蘇省立医学専門学校薬学主任、北平大学医学院教授	1929年12月
47	蔡文森	禹門	江蘇省無錫	上海自克路開業、新医与社会彙刊総編集	京都府立高等医学校畢 (1912)	日本	江蘇省立医学専門学校校長 (1913～1922)	1929年12月
48	丁求真	任生	浙江省天台	杭州西湖肺癆療養院長兼浙江医薬専門学校教授	千葉医専 (1914)、アメリカ留学	日本	第一革命時組織中国紅十字会以従之籌安会發生後謀浙江独立。浙江省立医薬専門学校校長 (1925)。	1929年12月
49	余巖	雲岫	浙江省鎮海	上海南京路開業、社会医報編集主任、中央衛生委員会委員、東方文化事業上海委員会委員	大阪医科大学畢 (1911)	日本	浙江省立医薬専門学校教授	1929年12月
50	李国幹	博仁	湖北省沔陽	漢口特別市衛生局長兼私立医院長	京都帝大医学部畢 (1919)	日本	湖北中山大学医科教授	1929年12月
51	謝利恒		浙江省杭県	上海中医専門学校長	家伝、父祖は歴代医学か文学で有名	中国		1929年12月
52	郭琦元	韻韓	江蘇省江陰県	上海東南医科大校長兼東南医院長	千葉医専畢 (1922)	日本	陸軍軍医官	1929年12月
53	孫洞環	鄺瞻	浙江省奉化	東三省陸軍衛戍病院長	大阪高等医学校 (1910)	日本	浙江省医薬専門学校教務長、熱河衛戍病院長 (1920)	1929年12月
54	謝応瑞		湖南省衡陽県	上海南京路開業、東方文化事業上海委員会委員 (1925年以降)	ロンドン皇家大学畢	イギリス		1929年12月

近代中国における医学者の海外留学と帰国後の活動

	名前	字	出身	現任	学歴	留学先	経歴	掲載年次
55	毛咸	子正	浙江省 江山県	浙江省政府民政庁技師、衛生導報編集主任、杭州平海路友愛診療所（開業）	国立北京医専畢、ベルリン大学留学研究（外科、皮膚花柳科）	ドイツ	国立北京医専助教教授兼医専附属医院外科医院、産婆養成所主任教授（1907～11）、北京孔德学院生理衛生教授（1909）、国立北京医科大学教授（1914）、広西梧州市立病院外科部長（1915～16）、南京特別市衛生局潔淨科長（1916）	1929年 12月
56	陳輝	光甫	浙江省 上虞県	陸軍軍医学校附属医院上校医務主任兼同校病理学系主任教官	天津北洋軍医学校第一期畢、ハーバード大学研究熱帯病学博士学位	アメリカ	陸軍第三師軍医官、防疫局検査官、紅十字会医官、浙江民政司衛生課課長、陸軍学校衛生教官、国立医科大学細菌学公使、陸軍学校衛生教官、衛戍司令部医務処科長。	1930年 1月
57	李定	慎微	浙江省 縉雲県	南洋医学院教務長、新医診断所医員	千葉医専畢（1923）	日本	浙江省医薬専門学校校長	1930年 1月
58	陳克恢		江蘇省 松江県	上海礼来薬廠藥物研究科主任	上海南洋大学畢、北平清華大学畢、アメリカウイスコンシン大学薬科学士、同生理学博士、ジョンボプキンス大学医学博士	アメリカ	北平協和医学学校薬物学教授（1923～25）、アメリカにて、「麻黄精」を研究	1930年 1月
59	謝筠寿		浙江省 余姚県	上海東南医科大学教授、上海同德医学専門学校教授、上海中徳産科女医学校教授、上海で開業、社会医報事務主任	浙江医薬専門学校医科畢（1916）、東京帝大医科選科（皮膚花柳科：1921）	日本	上海中国紅十字会南市医院医員、上海中国済生医院主任医師、江湾救済婦孺会留養院医師、上海南洋医科大学教授、上海人和産科学院教授	1930年 1月
60	王信	吉人	浙江省 臨海	浙江医薬専門学校教授、杭川医院医員、同医務主任兼外科主任	千葉医大畢（1924）	日本	千葉医科大学外科学副手（1924～26）、浙江省政府直轄広済医院外科主任（1927）	1930年 2月
61	江瑩	惠霖	広東省 花県	広州石祠開業、広州杏林医学社編集主任	広東中医薬専門学校第一期畢	中国	広済医院医師	1930年 2月
62	王世楷	世楷	四川省 華陽県	第五路軍兵站医院院長、第七師軍医処処長、江西剿匪指揮部傷病官兵収容所所長、海陸空軍總司令部行營衛生科科长長	長崎医大畢（1924）	日本	第一野戦病院院長	1930年 2月
63	盧明著	隱疇	広東省 新会県	広州流水井開業、全国医薬総聯会教材編委会委員、広東中医薬専門学校教授、広東光漢中医薬専門学校教授。		中国	広州中等以上之学校八校之教授	1930年 2月

	名前	字	出身	現任	学歴	留学先	経歴	掲載年次
64	呉麟孫	維高	浙江省 加興県	海陸空軍總司令部 検診所主任	浙江医業専門学校 医科畢、ドイツ・ ヴュルツブルク大 学医学博士	ドイツ	国民革命軍蔣總司令侍從 医、總司令部第七病院 長、總司令部軍医処第三路 辦事処主任、總司令部軍 医処医務科長	1930年 2月
65	李学瀛		天津県	北平特別市衛生局長	北洋軍医学校畢	中国	陸軍軍医学校第一任校長、 陸軍部軍医司長、模範団中 将軍医処長	1930年 3月
66	呉宗慶	序新	江西省 南昌	上海南洋医学院院 長兼事務長、眼科 教授、国民革命軍 長江要塞司令部軍 医処処長	愛知医専（1918）	日本	愛知病院外科医員、上海篠 崎医院医員、南昌市衛生局 局長、南洋医科大学教務長 （1927）	1930年 3月
67	施汝雄	宗飛	江蘇省 啓東県	南洋医学院実習院 主任、惠生産科学 校校長、上海特別 市公安局医官、上 海惠旅医院總主 任、上海普善医院 医務主任	南洋医科大学畢 （1923）	中国	浦東公立医院医師、紅十字 会傷兵第八院医師、聯義 医院医務主任、国民革命軍 警備司令部医官	1930年 3月
68	孫孝寬		貴州省 貴陽県	南洋医学院外科講 師、上海四八寛民 医院長	京都帝大医（1920）	日本	京都帝大付属医院外科及内 科助手、明石市博愛医院副 院長、国立自治学院講師、 中国公学講師	1930年 3月
69	夏建安	慎初	江蘇省 上海県	上海八仙橋医院 長、診療医報並医 業評論編集、南洋 医学院病理学教 授、中華民国医業 学会全国医聯会	大阪医科大（1917）	日本	江蘇省立医学専門学校教 授、校長、附属医院長、上 海医院医務長	1930年 3月
70	石錫祐	煥如	河北省 大城県	北平大学医学院眼 科教授、陸軍軍 学校教官	東北帝大医（1912）	日本	浙江医業専門学校眼科教 授、兼附属医院眼科部長、 兼浙江病院眼科主任、上海 嵩山路開業。	1930年 3月
71	蔡鴻	鵠程	江西省 南昌県	衛生部防疫司司長	天津海軍軍医学校 畢、フランス・ボ ルドー大学医学博 士、パリ大学癌学 院証書。	フランス	前直隸省派往呉橋等處防 疫、フランスAchen聖加客 医院医師、上海聖心医院醫 師。	1930年 4月
72	宋国賓	恪三	江蘇省 江都県	上海震旦大学医科 教授、上海安当医 院主任医師、上海 職業指導所健康導 師、新医与社会編 集正主任、医業評 論編集。	上海震旦大学畢、 フランスパリ・パ スツール学院畢	フランス	上海医師公会主任、上海特 別市衛生局西医試験委員。	1930年 4月
73	黄震亜	曼欧	浙江省 瑞安県	浙江省立医学専門 学校教務長兼教授 （1923）	東北帝大医 （1915）、同付属 医院山川・加藤内 科研究（1916）	日本	北平国立医学専門学校教授 （1916）、塞北檢疫委員 （1917）、陝西鎮高軍軍医 医官（1918）、河南檢疫委 員（1919）、山東省立医学 専門学校教授兼附属診療所 所長（1919）、江蘇省立医 学専門学校教授（1921）	1930年 4月

近代中国における医学者の海外留学と帰国後の活動

	名前	字	出身	現任	学歴	留学先	経歴	掲載年次
74	沈仲圭	仲圭	浙江省 杭県	滬杭甬鉄路医務処 職員	浙江宗文中学校畢	中国	上海中医専門学校教授、山西中医改進研究会名誉理事、全国医業總會委員	1930年 4月
75	潘其璵	経蓀	浙江省 紹興	開業医兼德美医院 医生	上海同済医科大学、岡山医大 (1923)	日本	国立北京医科大学教授、北洋防疫処医務科長、天津特別一區總医官、陸軍一等軍 医生	1930年 4月
76	馬炎昌	光普	河南省 鞏県	河南省政府診療所 主任、開封大同医 院院長	北京国立医科大学 畢 (1925)	中国	綏遠塞北医院院長、同平民 医院院長兼警務処医官 (1926)、国民革命軍第二 集團軍第十九師医務主任 (1927)、開封平民医院院 長 (1928)、予陝甘開封訓 政学院教授 (1929)、河南 医学会医院長 (1929)	1930年 4月
77	顧誠南		江蘇省 南京	ドイツ留学中	陸軍軍医学校畢	中国	第三師軍医処処長、同後方 医院医院長、第一師軍医処 処長	1930年 4月
78	龐国鎬	京周	江蘇省 呉県	上海同德医学専門 学校校長兼附屬医 院院長	同済大学医科畢 (1922)	中国	上海医師公会執行委員、医 業評論社理事、滬杭甬鉄路 医官、上海済生医院医生。	1930年 5月
79	戴尚文	季如	安徽省 合肥	南通大学医科教 授、附屬委委員泌 尿科医長	南通医学専門學校 畢、東京帝大選科 畢、伝染病研究所 研究員。	日本	安徽省善後督辦署軍医課 長、陸軍總医院院長兼全省 省立各學校衛生指導專員、 上海東南医大及南洋医大教 授、南通大学医科教務主任。	1930年 5月
80	湯貞祥	祝三	浙江省	浙江黄岩福音医院長	杭州之江大学予科 畢、上海南洋医科 大学畢 (1921)	中国	南京金陵大学医院医師、滁 州基督医院内外科主任兼外 科医師	1930年 5月
81	閻彝銘		河南省 浙川県	中山大学医科教 授、河南教育廠学 校衛生検査会委員	国立同済大学医科 畢、河南省派赴ド イツ実習並考察医 学。ドイツ・ゲッ チンゲン大学医学 博士。	ドイツ	上海実隆委員医師、ドイツ 歌庭根大学産科医師、ベル リン大学産婦科助手、国民 政府軍医監理委員会後方重 傷医院上校医官兼主任、杭 川市立病院外科主任兼皮膚 花柳科主任、首都第二陸軍 医院医務主任。	1930年 5月
82	金誦盤	日新	江蘇省 呉江県	衛生部統計司長	上海同済大学医科 第一期畢 (1914)	中国	上海行医 (1915～25)、黄 埔軍官学校軍医処上校処長 (1925)、国民革命軍總司 令部兵站總監部衛生処上校 処長 (1926)、国民革命軍 總司令部隨從医官(1927)、 陸軍空軍總司令部兵站總監 部衛生処少将処長 (1928)	1930年 6月

	名前	字	出身	現任	学歴	留学先	経歴	掲載年次
83	胡宣明		福建省 龍溪県	鉄道部衛生処処 長、衛生部中央衛 生委員会委員	聖約翰（セント ジョーンズ）大学 畢（文学士、1910）、 アメリカジョンボ プキンス大学医学 畢 医 学 博 士 （1915）、ハーバ ード大学マサセッ チュー工科専門学 校合辦衛生官専門 学校畢（1916）、 第二次留美研究衛 生行政（1925～28）	アメリカ	中華衛生教育会副総幹事兼 漢文総編集、学校衛生科主 任、広州市衛生局長、内政 部衛生司技正、国立中央大 学医学院衛生副教授兼呉淞 衛生模範区主任、鉄道部技 官正	1930年 6月
84	戴隸齡	穠季	江蘇省 鎮江県	鎮江弘仁医院院長	長崎医專畢 （1909）、東京陸 軍軍医学学校修業 （1916）	日本	南京軍医学堂教官、民生部 司員南京陸軍病院主任、天 津陸軍軍医学学校教務長、北 京陸軍軍医学学校校長、国立 北京医科大学講師、保定河 北大医学科教授、国民政府 軍政部陸軍署陸軍軍医学校 校長、中国紅十字總會名誉 會員派充日本関東震災慰問 員	1930年 6月
85	翁之龍	叔泉	江蘇省 常熟県	国立中山大学医学 院教授兼附属第一 医院院長、付設護 士学校校長	上海同济大学医科 畢（1920）。ドイ ツフランクフルト 大学医学博士	ドイツ	北京外城官医名譽医官、 北京療養病院主任医生、国 立北京大学教授。	1930年 6月
86	陳宗賢		湖北省 武昌県	衛生部中央防疫処 処長、兼技術科科 長	武昌文華大学畢理 学士、アメリカ ハーバード大学畢 医学博士。	アメリカ	北平協和医学学校細菌学教 授、アメリカコロンビア大 学細菌学教授	1930年 6月
87	余澧	幼塵	浙江省 紹興	衛生部中央防疫処 技正、北平大学医 学院衛生学講師	国立北京医学専門 学校畢（1923）、 アメリカハーバ ード衛生学院、衛生 学博士（1929）	アメリカ	ロックフェラー駐華医者研 究員（1923～26）、北京協 和医科大学細菌学助教 （1927）	1930年 6月
88	瞿紹衡	原名 鈞	江蘇省 上海県	北平女子産科学校 校長、北平施医院 院長、瞿氏夫婦医 院院長	大阪医大（1916）	日本		1930年 7月
89	経利彬	燧初	浙江省 上虞県	国立北平研究院生 物学研究所主任	フランス国家理学 博士、医学博士	フランス	国立北平大学理学分院院 長、同女子学院院長	1930年 7月
90	周夢白		浙江省 衢県	中法製薬所所長、 中華民国薬学会執 委、上海診療医報 主編	浙江医薬専門学校 畢（1918）、東京 小林製薬工場見習 （1919）、北里研 究所化学室研究 （1920）	日本	江蘇省立医院薬師、江蘇医 専教員、中国紅十字会杭州 総医院薬劑長、江蘇理科講 習会公使、公立上海医院薬 局主任、上海南洋医科大学 教授、上海女子医学専門学 校教授	1930年 7月

近代中国における医学者の海外留学と帰国後の活動

	名前	字	出身	現任	学歴	留学先	経歴	掲載年次
91	鄧光濟	文波	貴州省貴陽県	貴州省立医院院長、貴州県自治講習所、衛生行政学教授	日本中央大学法律科 畢 (1913)、千葉医専 (1917)、日本内務大臣医師免許状受領 (1918)	日本	千葉県立病院耳鼻咽喉科嘱託医師 (1918)、貴州陸軍医院院長 (1919)、貴州省立医院院長 (1919)、貴州省立医院附設女子産科講習所所長 (1920)、貴州省長公署軍医課課長 (1922)、貴州全省清鄉總司令部軍医課課長 (1923)、貴州大学医学専科教授	1930年7月
92	俞鳳賓	慶恩	江蘇省太倉県	衛生部中央衛生委員会委員、国立中央大学医学院教授、中国紅十字会上海總医院特約医師	上海聖約翰 (セントジョーンズ) 大学 畢 (1908)、アメリカペンシルバニア大学医科畢、医学博士 (1913)	アメリカ	中華医学会会長、聖約翰大学医科教授、遠東熱帯病学会会員	1930年7月
93	蔣福京	公毅	浙江省海寧県	漢口特別市市立医院院長	陸軍軍医学校医科第八期 畢 (1916)	中国	西北边防第四混成旅軍医処長、綏遠檢疫区疑似病院副院長、兼細菌検査部技士、各總軍医院医務主任、国民革命軍第九軍第二師团軍医長、同陸軍第二師軍医処長。	1930年8月
94	王慎軒		浙江省紹興	婦女医学雑誌、家庭医業常識編集主任	上海中医専門学校 畢 (1925)	中国	上海中医学会中医雜誌編集、呉県医学会医業衛生報主編、呉県中医公会第三区会委員、南通警察庁医員、蘇州警察庁医員、蘇州女科医社主編	1930年8月
95	陸瓊鎮	[女性]	広東省南海県	仏山市崇徳医院産婦人科主任	広東光華医科大学 畢 (1918)、ドイツ医学院産婦内科学科 畢 (1922)	ドイツ	北平民国大学女校医兼教務員	1930年8月
96	湯紀湖	蕨舟	江蘇省上海	上海東南医学院教授、医務長	千葉医大 畢	日本	国民革命軍第一軍後方院長、広州第一衛戍病院医務長、上海特別市衛生局第一屆医師審査委員会委員	1930年9月
97	陳惠民		浙江省嘉興県	嘉善県公立医院院長	南洋医科大学 畢 (1924)	中国	中国紅十字会傷兵第六医院院長、上海惠旅養病院医師、嘉善時疫医院医師、嘉善県戒煙医院医務主任	1930年9月
98	夏蒼霖		浙江省嘉興県	硤石生々医院院長	浙江公立医業専門学校 畢	中国	大名陸軍医院医長兼第十五混成旅学兵連教官、冀南軍士学校医官兼軍陣衛生学及毒気学教官、大名県公署科長兼遊撃隊總部正軍医官、国民第三軍第一師歩一旅二团軍医官、豫陝甘剿匪第一路第七旅野戰病院長、陸軍第七混成旅軍医処長兼軍医院長、海寧県衛生委員会委員	1930年9月
99	端木樹人	壽伯	浙江省麗入県	硤石生々医院主任	浙江公立医業専門学校 畢 (1921)	中国	保定陸軍總医院医長、直魯豫巡閱使署医官、陸軍第15混成旅軍医処長、中央陸軍軍医官学校第一医務所主任兼衛生学教授、法規編審委員会委員、考試委員会委員	1930年9月

	名前	字	出身	現任	学歴	留学先	経歴	掲載年次
100	李允恪		山西省 万泉県	天津市立医院院長兼 外科主任	ドイツベルリン大 学畢、同付属医院 研究、医学博士	ドイツ	山西省太原並州大学医学院 外科主任教授、陸軍第三方面 軍總司令部參議、天津市 政府衛生顧問	1930年 10月
101	汪元臣	善甫	江蘇省 儀徵県	江蘇省立医院院長、 江蘇省保安処衛生 顧問、鎮江県医師 公会執行委員会常 務委員主席	ドイツベルリン大 学畢 (1927)、医 学博士	ドイツ	江蘇省民政庁技正、同警官 学校及区長訓練処医務主 任、江蘇省立医院医務長兼 外科主任、上海同徳医学専 門学校教授、同同徳産科学 校教授、同 南洋医科大学 教授	1930年 10月
102	梁心	仏一	広東省 陽江県	広東省仏山崇徳医 院院長、広東光華医 学院薬物学教授	広東光華医科大学 畢 (1918)、ドイ ツ医学院内外産婦 専科畢 (1922)	ドイツ	中国參戰軍軍医官 (1919)、 中国辺防軍軍医官 (1919)、 北平民国大学校医 (1919)、 仏山市衛生局局長 (1926)、 江門市衛生局局長 (1927)	1930年 10月
103	梅貽琳		河北省 天津	南京市衛生局長	シカゴ大学医学博 士、ロンドン熱帯 病学研究院医学博 士、米ジョンボプ キンス大学公共衛 生学博士、フラン ス・パスツール研 究所研究微生物 学、ニューヨーク 伝染病医院研究防 疫	アメリカ、 イギリス、 フランス	中央防疫処技師兼科長、衛 生部簡任技正、国立中央大 学医学院衛生系主任教授、 吳淞衛生模範区主任、中華 衛生教育会会長	1930年 10月
104	鍾志和		浙江省 紹興	嘉興福音医院内科 小児科副主任、国 立第一交通大学副 校医	浙江広済医学専門 学校畢	中国	浙江体育専門学校校医、杭 州広済医院医師、杭州之江 大学校医、寧波仁澤医院医 務主任、嘉興緯成公司廠 医、杭州済産科学学校薬物 学主任教授、杭州医院院務 委員、同助産学校教務主任	1930年 10月
105	林可勝		福建省 吾環県 厦門	北平協和医学院生 理学系主任教授、 中国生理学雑誌編 集主任	イギリス・エディ ンバラ大学畢	イギリス	エディンバラ大学医科組織 学講師 (1917～23)、中華 医学会会長	1930年 10月
106	李桂登	雲升	山東省 濰県	山東省鄆城縣三民 医院院長	山東大学医科畢	中国	済南華東医院院長、陸軍第三 師軍医主任、同第三十五師 軍医処長	1930年 10月

2) 留学先の特徴

これら106名のうち、中国国内でのみで学び、留学経験のない医学者は21名であった（全体比19.4%）。それを除く85名の留学先を人数の多い順に並べると、以下ようになる（複数国への留学（滞在）経験者はそれぞれ「1」と数えたため、総計は100%を越えている）。

日本50名（全体比47.2%）、ドイツ19名（17.9%）、アメリカ15名（13.9%）、イギリス6名（5.7%）、フランス6名（5.7%）。

掲載された媒体が、日本の団体であった同仁会発行の雑誌であることを考えれば、日本留学経験者がその半分弱を占めているのは当然と言える。逆に「少ない」という見方さえもできるかもしれない。しかしながら、その一方で、中国語による出版、すなわち中国人を主たる読者層と想定しているため、留学未経験者も2割ほど取り上げられていると推察される。さらに欧米留学経験者の総計が4割強にのぼることから、この企画自体は「日本」を前面に打ち出すためのものでなかったと思われる。

3) 留学先大学の特色

中国の医学者たちは、留学先でどのような大学・学校で学んだのだろうか。それを国別・学校別で示すと以下になる（一人が複数の国や複数の学校を経ている場合はそれぞれ「1」とカウントしている）。

留学を経験していない人については、中国での出身校を示した。なお、海外留学経験者については、中国の医学校などを経ている、その学校名は集計に入れていない。つまり、本稿は、留学先を知りたいことを主たる目的としているため、そのような処理にしたことをご了解いただきたい。

まず、日本50名の留学先は以下であった（研究滞在、博士号授与のみも含む。その他の国々の留学先も同様の処理をした。複数の大学に所属した場合はそれぞれを「1」と数えている）。

千葉医専・医科大学（10）、大阪高等医学校・医科大学（8）、東京帝国大学（6）、京都帝国大学（5）、東北帝国大学（4）、長崎医専・医科大学（4）、金沢医専・医科大学（3）、九州帝国大学（3）、京都府立医科大学（2）、岡山医専・医科大学（2）、東京女子医学専門学校（1）、東京陸軍軍医学校（1）、愛知医学専門学校（1）、伝染病研究所（2）、東京小林製薬工場見習（1）、北里研究所（1）、日本大学法学科（1）。

千葉医学専門学校・千葉医科大学が最も多かったのは、1908年から15年間に、医薬留学生の公費留学の指定校、いわゆる「五校特約校」になっていたためであると考えられる⁷⁾。

次いで多かったドイツ19名の留学先は以下であった。

ベルリン大学（8）、ドイツ医学院（2）、ゲッティンゲン大学（1）、フ

ランクフルト大学（1）、ミュンヘン大学（1）、ヴェルツブルク大学（1）、プロシア公衆衛生学院（1）、留学先不詳（2）、学位取得（大学名不詳）（3）。

アメリカ15名の留学先は、以下である。

ハーバード大学（7）、ジョンボプキンス大学（5）、ペンシルバニア大学（2）、ワシントン大学（1）、シカゴ大学（1）、コロンビア大学（1）、ウィスコンシン大学（1）、ハーバード大学マサセッチュー工科専門学校合辨衛生官専門学校（1）。

フランスの6名の留学先は以下の通り。

リヨン大学（1）、パリ大学癌学院（1）、パリ医学校（1）、ボルドー大学（1）、パリ熱帯病院専科（1）、パスツール学院（1）、パスツール研究所（1）、フランス国家理学博士・医学博士（1）

イギリスの6名は、以下で学んだ。

ケンブリッジ大学（2）、エディンバラ大学（1）、ロンドン皇家大学（1）、リバプール大学（1）、ロンドン熱帯病学研究院（1）。

最後となるが、留学経験がないとみられる中国人21名の出身校は、以下の通りである。

（上海）南洋医科大学（3）、同済大学（3）、浙江省立医薬専門学校（2）、陸軍軍医学校（2）、天津陸軍軍医学校（1）、北洋軍医学校（1）、北京国立医科大学（1）、江蘇医学専門学校（1）、山東大学（1）、浙江広済医学専門学校（1）、広東中医薬専門学校（1）、上海中医専門学校（1）、浙江宗文中学校（1）、家伝（1）、未記載（1）。

各国の各大学などの特色については、本稿では論ずることをせず、後日の課題としたい。ただ、直上の記述で気になったのは、「中医学（漢方医学）」の関連学校あるいは「家伝」で修めた医者が何名か含まれている点である。同仁会の基本的な役割は、西洋医学を中国などに普及することにあった。したがって、本来は「中医」学者を「医界名士」にあげるのは、その本旨からズレるようにも思える。しかし、先に触れたように、中国語版として中国国内への普及も目指していたため、おそらく例外的に掲載したものと思われる。

4) 職業の傾向の特色

名士録は先に示した「表」のように、各医学者の「履歴」に関しては、「現任」と「経歴」に分けて紹介している。本項では、「現任」に記載されている職業を以下の12種に筆者が仮分類し、それぞれに該当する人士の数を示した（複数の記載がある場合はそれぞれ「1」と数えた）。

医科大学・医学校教官37（106名中の比率34.9%）、病院長24（22.6%）、勤務医（病院、官庁、学校など）18（17.0%）、開業医14（13.2%）、医学雑誌編集担当14（13.2%）、地方政府の衛生・医療行政官12（11.3%）、中央政府の衛生・医療行政官11（10.4%）、軍隊関連4（3.8%）、工場勤務3（2.8%）、医学協会長1（0.9%）、留学中2（1.9%）、現任未記載3（2.8%）。

やはり、医科大学教官や病院長など社会的に影響を持っていた人士が多かった。中央や地方政府の行政官に就いていた人も少なくない。また少々意外なのは、医学雑誌の編集をしていることをアピールしている人が14名もいたことである。西洋医学の研究また普及において、雑誌が重要な役割を果たしていた事を物語る事案と思われる。

なお、別掲した「表」を見れば、一目瞭然であるが、「現任」とは別記載になっている「経歴」欄もきわめて多彩な内容を含んでいる。したがって、「職業遍歴」の多様性を知るためには、それも含めた数値を挙げるという考え方もあるだろう。しかし、数が膨大になることと、この「名士録」が書かれた時点の現職をまず抑えるべきと考えたため、「経歴」における職業についてはここでは反映しないこととする。

5) 出身省別

浙江省38名（全体比35.8%）、江蘇省28名（26.4%）、広東省9名、河北省6名、奉天省4名、湖北省3名、福建省3名、河南省2名、山東省2名、湖南省2名、江西省2名、広西省2名、貴州省2名、安徽省1名、山西省1名、四川省1名。

こちらについては、海外留学生を多く輩出した浙江・江蘇の両省がやはり目立つ。この二省で6割になってしまうのは、「僻処遠地」の情報も掲載したいという企画の意図から外れ、偏りが出てしまったようにも思える。

2 現代中国における「中華民国医界名士録」掲載者の評価

前章では、『同仁医学』（中文版）に1929年7月から1930年10月に掲載された106名の評価、留学先などについて、その内容に則して紹介した。本章では、ここで取り上げられた医学者・医師たちが、現在の中国でどのような評価を与えられているかを併せてみることにする。

ただし、本稿でこの106名の「評価」を悉皆的に調査するのは困難なので、次の4つの人名辞典類に絞り、そこに掲載されている人士の特質について検討することとする。

1冊目は、1992年に王徳林ほかが主編となった『中華留学名人辞典』（東北師範大学出版社）である。「序」（伍修権著）には「この辞典は中華留学生の事績を最初に著した辞書である。この出版は一大成果であることは疑いない」との自賛が示されている。確かに、779頁に海外留学者2,025名が収められている点は、開拓者の苦労の証とも言える。

2冊目は、周棉主編『中国留学生大辞典』（南京大学出版社、1999年）で、1847年から1978年までの期間の留学生4,000余名が掲載されている（全631頁）。

3冊目は、徐友春主編『民国人物大辞典（増訂版）』（河北人民出版社、2007年）である。同書は1905年の中国同盟会成立から1949年の中華人民共和国成立までに活躍した人士を17,000名も収録している大部の辞典である（2,953頁を上下2巻に分冊）。留学経験者以外もちろん含まれているが、結果として、この辞典に所収されている「名士録」所収の人物が最も多かった。

4冊目は、鄭鉄濤・程之范主編『中国医学通史 近代卷』（人民衛生出版社、2000年）である。これは631頁もの分量がある大部の「通史」で、「上篇 中医篇」全8章、「中篇 西医篇」全9章、「下篇 解放区衛生編」全3章からなる。このうち、「中篇」の第9章が「医学人物」に当てられ、33名の小伝が掲載されている。

以上の4冊と『同仁会医学雑誌』が取り上げた戦前期の「中華民国医界名士録」の評価を、以下で照らしていくことにする。なお、4冊が紹介する「名士」の事績について、1章の「表」で示した1920年代末までの「経歴」と重複する部分は原則的に紹介せず、それ以降の顕著な事例、とりわけ

中華人民共和国成立以後の「活躍」や「評価」に留意していくこととする。

1)『中華留学名人辞典』(1992年出版)

106名のうち、同書に収められているのは6名だけであった。「名士録」には生没年の明示はなかったが、こちらは20世紀末に発刊された辞典であるため、多くの場合それが示されている。よって、それを加えておいた(なお、名前の後ろに付けた数字は、第1章の「表」に載せた人士の通し番号である。また最後に付した頁は、辞典での掲載頁である)。

- ・金宝善(3)(1893~1984) 1948~50年、連合国善後救済総署児童急救基金会医薬総顧問。新中国成立後、衛生部参事室主任。北京医学院衛生系主任教授⁽⁸⁾。467頁。
 - ・牛惠生(10)(1892~1937) 1932年「中国医学会」主席。上海中山医院院長となったが、1937年5月、上海で病死。67頁。
 - ・侯宗濂(20)(1900~1992) 新中国成立後、西北医学院、西安医学院院長。陝西省委主任委員、陝西省科協主席、中華医学会理事など歴任。1989年九三学社中央参議委員会副主任。全国人大代表。533頁。
 - ・湯爾和(23)(1877~1940) 1930年、東北辺防軍司令長官公署参議となり、東北政務委員会委員などを歴任。1937年の「九一八事変」以降、行政院北平政務委員会委員、華北戦区救済委員会委員となる。1938年、日本側に投降。1940年、華北政務委員会常務委員などに就くが、1940年病没。188頁。
 - ・梁伯強(26)(1899~1968) ドイツ留学から帰国後、同済大学医学院副教授、中山医学院腫瘍研究所所長、中国科学院委員。1956年中国共産党加入。658頁。
 - ・褚民誼(36)(1884~1946)。1940年汪兆銘偽政權の行政院院長、外交部部長、駐日大使などを歴任。1946年8月「漢奸」として死刑。710頁。
- 以上。

2)『中国留学生大辞典』(1999年出版)

こちらには10名が収録されており、『中華留学名人辞典』所収の6名はす

べて取り上げられている(それを表すため、生没年の後に「中華」と入れた)。
以下では原則的に新しい情報を加えるが、1)の叙述とさほど変わらない場合は、名前を挙げるにとどめている。

- ・劉瑞恒(1)(1891~1961) 1930年中央医院創設。行政院衛生署署長、軍政部軍医総監。1949年、台湾に渡り、内政部衛生設計委员会主任委員。1951年台湾「中国紅十字總會」会長。109頁。
 - ・嚴智鐘(2)(1899~?) 1928年南京国民政府衛生部医政司司長。1931年内政部衛生署技正。1932年軍政部陸軍軍医学校校長。中国現代衛生防疫の初期の開拓者。168頁。
 - ・金宝善(3)(1893~1984)「中華」。272頁。
 - ・伍連德(6)(1879~1960) 1928年国民政府軍政部陸軍署医司司長。1937年衛生署海港檢疫処処長。日中戦争勃発後、マレーシアに住所を移し、個人診療所を開く。1948年中央研究院第一期院士に当選。90頁。
 - ・牛惠生(10)(1892~1937)「中華」 1929年上海に整形医院を創業。協和外科主任。1931年上海セントジョーンズ大学医学院。上海瀘江女子医学院教授。1932年中国医学会主席。1936年広済医院董事長。1937年上海中山医院院長。43頁。
 - ・侯宗濂(20)(1900~1992)「中華」。p310 1931年帰国後、国立北平大学医学院教授。のち福建医学院を創設。国立西北医学院教授、西安医学院教授、院長。310頁。
 - ・湯爾和(23)(1878~1940)「中華」。114頁。
 - ・梁伯強(26)(1899~1968)「中華」。第一期から第三期の全人大代表。長きにわたり病理学研究と教学に従事した、国内有数の病理学者、医学教育者。387頁。
 - ・洪式閻(43)(1894~1955) 1928年杭州に自費で熱帯病研究所を創設。わが国最初の寄生虫学的研究機構とした。1949年後、中央衛生研究所華東分院院長、浙江省衛生庁庁長、浙江省人民政府委員。1955年中国科学院学部医院に当選。317頁。
 - ・褚民誼(36)(1884~1946)「中華」。428頁。
- 以上。

3)『民国人物大辞典（増訂版）』（2007年出版）。

この辞典は収録人数が17,000余と多いためか、「名士録」所載の人士も24名が紹介されている。さきほどと同様に、1)「中華」、2)「中国」に掲載されていた場合はそれを示すとともに、重複箇所は紹介せず、新規情報のみを収録しておく。

- ・金宝善（3）（1893～1984）「中華」「中国」。885頁。
- ・全紹清（5）（1884～ ） 1928年天津市政府衛生局局长、31年退職。31年、天津市政府参事、35年辞職。392頁。
- ・伍連徳（6）（1879～1960）「中国」。373頁。
- ・胡鴻基（7）（1894～ ） 1927年上海市政府衛生局局长、32年衛生局局长免職。1003頁。
- ・牛惠霖（9）（1889～1937） 上海中国紅十字会総医生兼名誉外科医生。上海聖約翰（セントジョーンズ）大学教授。中国全国医学会会長、後、上海で開業医。209頁。
- ・牛惠生（10）（1892～1937）「中華」、「中国」。209頁。
- ・石增栄（13）（1897～1976）吉長鉄路医院眼科主任、院長。のち開業医。1949年国内最初の角膜移植手術に成功。共和国成立後は、ハルビン医科大学教授、黒竜江省眼病防治所所長。1954年第一期全国人民代表大会代表。1959年中国共産党に入党。全人代の代表を1964年の三期まで務める。262頁。
- ・阮尚介（15）（1892～1960） 1917年同済大学教授、27年辞職。24年ドイツベルリン工業学院名誉工学博士。1931年上海市兵工廠廠長、技師長。軍政部兵工署、軍械局。抗日戦争期間、北京大学工学院院長。「東亜文化協議会」評議員。戦勝後、龍煙鉄鉱主管。共和国成立後、中国人民大学ドイツ語教員。410頁。
- ・周威（16）（1885～ ） 江蘇省立医学専門学校校長、国立中央大学校医。
※なお、履歴について、ベルリン大学に留学し、博士号を取得した記述はあるが、金沢医学専門学校を1909年に卒業した記述はない。890頁。
- ・侯宗濂（20）（1900～1992）「中華」、「中国」。1017頁。
- ・湯爾和（23）（1878～1940）「中華」「中国」。2069頁。

- ・劉曜曦 (25) (1898～1978) 満州医科大学副教授、上海中央大学医学院副教授、国立瀋陽医学院教授。共和国成立後、中国医科大学教授、解剖教研室主任。中国解剖学会の創始者のひとり。2, 528頁。
- ・梁伯強 (26) (1899～1968)。「中華」「中国」。1937年中山大学医学院院長。共和国成立後も、中山大学医学院副院長。中国科学院生物部委員。1, 722頁。
- ・閻德潤 (27) (1898～1984) 満州医科大学副教授、ハルビン医科大学専門学校教授。ハルビン医科大学校長。共和国成立後、中国医科大学教授生理教研室主任。2, 647頁。
- ・侯毓汶 (30) (1882～1974) 1928年衛生部技正、北京市衛生局局長、中華医学会会長。1941年千葉医科大学から博士号授与。1943年華北政務委員会農務総署署長。共和国建国後、平原省衛生局顧問、平原省医科学校副校長、保定医学专科学校副校長。1, 020頁。
- ・褚民誼 (36) (1884～1946)「中華」「中国」。2, 211頁。
- ・胡定安 (37) (生没年 未記載) ドイツから帰国後、南京市衛生局局長、国立江蘇医学院院長。1929年総理奉安迎櫬指揮部衛生組副主任兼救護隊主任幹事。全国医師公聯会理事。1943年三民主義青年団第一期中央幹事会幹事。1946年制憲国民大会代表。48年行憲国民大会代表。987頁。
- ・洪式閻 (43) (1894～1955)「中国」。1929年九州大学から博士号授与。1936年国立江蘇南通医学院教授。抗日戦争勃発後、師生代辦軍医署第七重傷医院を組織。38年江蘇医学院教授兼寄生虫学部主任。抗日戦争勝利後、1946年台湾大学熱帯医学研究所所長。1948年鎮江国立江蘇医学院執教。1, 052頁。
- ・蔡 鴻 (71) (1897～) 1928年国民政府衛生部防疫司司長、1931年内政部衛生署技正。2, 217頁。
- ・沈仲圭 (74) (1901～) 1918年杭州で中医学の名医・王香岩に師事し、四年間中医学を学ぶ。1928年上海中医専門学校の教員となる。1930年、上海国医学院、32年上海中国医学院教員。34年西湖中医虚損療養院医師。39年最高法院医官。40年国民政府賑濟委員会青木関施診所主任。45年衛生署陪都中医院婦科主任。51年西南衛生部医政処中医科および重慶市衛生工作者協会問診部中医師。重慶市中医進修修学校教師。1985年中医研

究院専任諮詢委員会委員。740頁。

- ・ 胡宣明（83）（1887～ ） 1933年第三期立法院立法委員。35年第四期立法院立法委員。46年制憲国民大会代表。989頁。
- ・ 戴隸齡（84）（1884～1961） 抗日戦争勝利後、鎮江に戻り、弘仁医院を再建。共和国成立後は、蘇南第一期各界人民代表会議代表。1950年鎮江專署衛生科長。53年、蘇州医士学校校長、56年鎮江医士学校校長。2, 679頁。
- ・ 陳宗賢（86）（1892～1979） 1929年から39年にかけて、アメリカ、ドイツ、フランスなど十カ国を訪問し、生物製品を考察。1934～37年 蒙綏防疫処と西北防疫処の建設責任を負う。共和国成立後は、上海生物製品研究所所長、衛生部生物製品委員会副主任。1, 433頁。
- ・ 梅貽琳（103）（1896～ ） 1930年南京市衛生局局長。34年軍政部陸軍署軍医司司長。1, 559頁。

4)『中国医学通史 近代卷』（2000年）は、33名の「西医」小伝を載せているが、「名士録」と重なるのは8名である。1)～3)が辞典であり、その経歴などを淡々と叙述していたのに対し、本書は、短めながら歴史的な評価も明記しているので、それぞれの端的な叙述も紹介しておこう。

- ・ 劉瑞恒（1）（1891/90?～1961）「中国」。「中国近現代公共衛生学者」。中華民国期に、衛生行政部門で先導的な役割を果たし、中国の医薬衛生事業の発展に貢献した。534頁。
- ・ 金宝善（3）（1893～1984）「中華」「中国」「民国」。「中国近代公共衛生学者」。中華民国期に衛生行政部門で30年にわたり、中国衛生防疫事業や現代医療衛生制度の建設、海港檢疫権の回収、地方衛生機構の建設、伝染病対策などに貢献した。さらに公共衛生事業を担う人材を育成した。535頁。
- ・ 伍連徳（6）（1879～1960）「中国」「民国」。「中国近代公共衛生学者。防疫事業の先駆者」。「伍は愛国思想を持った傑出した医学活動家であった。中国予防医学のため、医学教育事業で多くの創造的な貢献をした」。532頁。
- ・ 牛惠霖（9）（1889～1937）「民国」。「中国近代臨床医学者」。533頁。
- ・ 牛惠生（10）（1892～1937）「中華」「中国」「民国」。「中国近代の著名な骨科医師」。1915年中華医学会が創設された時の会員で、中華医学会が改組

(博医会と合併)された時、会長となった。学会活動のため、心血を注ぎ、中華医学会図書館に図書資料を大量に寄贈したため、この図書館は「牛惠生図書館」と命名された。537頁。

- ・謝元甫 (24) (1887～1951)「中国近代泌尿外科学者」。1927～30年北平中央医院院長。1942年北平開業医。1946～51年北京医学院泌尿外科教授。1949～51年北京協和医学院顧問。「我が国泌尿外科の先駆者」。533頁。
- ・徐誦明 (32) (1890～1991)「中国近代医学教育者、病理学者」。1939～44年重慶教育委員会常務委員。44～46年同済大学校長。46～48年瀋陽医学院院長兼病理学教授。1950年中央衛生部教育處處長兼北京大学医学院病理学教授。1950年代の教育處處長の期間に、全国医学教育規則・教学計画・大学院設置の制定に関わり、新中国の医学教育事業の発展に貢献した。534頁。
- ・洪式閻 (43) (1894～1955)「中国」「民国」。「中国近代寄生虫学者」。「我が国の寄生虫病予防研究の開拓者」。「人体寄生虫学の先駆者の一人」。1950年浙江衛生実験院を創設し、院長となる。51年浙江衛生庁庁長兼浙江医学院院長。536頁。

以上。

なお、この『通史』に掲載された33名の留学先を国別にまとめると次のようになる(延べ数)。アメリカ23名、イギリス9名、日本4名、ドイツ・フランス・カナダ各1名、中国(留学経験なし)2名。百分比では、アメリカが70%、イギリスが27%、日本が12%であった。

「中華民国医界名士録」(106名)においては、アメリカ14%、イギリス6%、日本47%であったことと対比すると、2000年時における「評価」が戦前期と大きく変じたことが分かる。もちろん編集側の立場や目的が異なること、母数自体が異なるためであることも原因のひとつであろう。しかしこの差異については別の機会に検討を加えたい。

むすびに代えて

日本が1902年に創設した同仁会の企画(1929～30年)で、「中華民国医界

名士」と認定された半数近くが、日本留学（あるいは学位獲得）した人士であった。それは同仁会の目的方針を考えれば、ある意味当然であろうが、欧米留学学者も3～4割紹介されていた。またそれのみか、「中医学」の専門家も「名士」として数名載せられていた⁽⁹⁾。それを見ると、この企画が比較的幅広い編集方針をもって進められたことが分かる。

一方、近年（1992年から2007年）に発刊された人名辞典類では、中華民国期の貢献評価に加え、新中国において、どのような政治的社会的役割を果たしたかの業績も必要な条件であったと思われる。

さて、この「名士録」掲載の106名のうち、『中国医学通史 近代巻』までを含む4冊すべてに名前が見えたのは、金宝善（3）と牛惠生（10）の二人だけであった。それ以外では、伍連徳（6）、洪式閻（43）が『通史』を含む3冊で紹介された人士である。さらに辞典3冊への掲載者は、侯宗濂（20）、湯爾和（23）、梁伯強（26）、褚民誼（36）の4名で、これらの人々が戦後の評価を含め、近現代中国の「医界名士」中の名士と認めて良いのだろう。

しかしながら、現代中国における評価としては、褚民誼（36）が日中戦争下の傀儡政府に協力していたため、「漢奸」として処刑されたことには留意しておきたい。さらに、1940年に病没した湯爾和（23）も傀儡政府の高官に就いており⁽¹⁰⁾、長生した場合は、褚民誼と同じ運命をたどった公算がある。

筆者は千葉医専・医大に留学していた元留学生の帰国後の活動についての調査を行なったが、その一人である侯毓汶（30）は、汪兆銘が南京に作った華北政務委員会に1943年協力していたことが、『民国人物大辞典』にも明記されている（前掲）。しかし、侯は新中国の成立後、医科大学教員となり、1974年までの生を保つことができた⁽¹¹⁾。

本稿ではそれ以上、個々の動向紹介や検討はできないが、侯と同様に日中戦争下で、日本に「協力」をせざるを得なかった元日本留学学者であっても、新中国において、医学者・医師として活躍することを許された人士はいた⁽¹²⁾。新たな国家建設にあたり、科学者の力が必要であったという推測は成り立つが、このあたりは今後さらに精査していく必要があるだろう。

また「中華民国医界名士録」に掲載されながら、（本稿で参照したのは4

冊だけはあるが) 戦後の辞典類に再録されなかった人士の「戦後」についても改めて整理しなければならないだろう。その際、たとえば日本留学経験者とアメリカ留学経験者への対応は異なっていたのか、医学者それ自体の実力(評価)に応じた対応がなされたかなど究明すべき課題は多い。

本稿は、同仁会が特集した「中華民国医界名士録」の紹介とその一部の評価を羅列したに留まった。詳細な検討は今後に期したい。

なお、本稿脱稿後に、『『中華民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留学歴—日本留学者を中心に』『千葉大学国際教養学研究』5号(2021年3月)と題し、中国医学者の日本留学者500名についての概要をまとめた拙稿を書きあげた。本稿に合わせ、参照いただければ、幸いである。

[付記] 本研究は、2020~22年度JSPS科研費基盤C・一般(20K02508)「1930~40年代日本における中国人留学生教育」の助成を受けた成果である。

- (1) たとえば、大里浩秋・孫安石編著で、16名が寄稿した『近現代中国人日本留學生の諸相—「管理」と「交流」を中心に』(御茶の水書房、2015年)には最新の成果が収められている。また、近代日本で留學生を多く受け入れた学校に焦点を当てた共同研究の発刊も続いており、李成市・劉傑編著『留學生の早稲田—近代日本の知の接触領域』(早稲田大学出版部、2015年)、高田幸男編著『戦前期アジア留學生と明治大学』(東方書店、2019年)ほかがある。なお、見城は、現在の千葉大学の前身校への留學生についてまとめた『留學生は近代日本で何を学んだのか—医薬・園芸・デザイン・師範』(日本経済評論社、2018年)を出版している。
- (2) 同前、見城『留學生は近代日本で何を学んだのか』。同書の原型となり、医学薬学留學生を扱った論文に、見城「明治~昭和期の千葉医学専門學校・千葉医科大学における留學生の動向」『国際教育』2号、2009年、見城「留日医薬學生の帰国後の活動と現代中国における評価」『国際教育』3号、2010年(ともに千葉大学国際教育センター発刊)などがある。
- (3) 「同仁会規則概要」『同仁』第1号、1906年6月号。
- (4) 同仁会側の正史として『同仁会三十年史』(1932年)、『同仁会四十年史』(1943

- 年)があるが、研究はそれほど進んでいるとは言えない。そのなかで、丁蕾「近代日本の対中医療・文化活動—同仁会研究①～④」『日本医史学雑誌』45-4、46-4、1999～2000年)は、中国の近代医学発展に貢献した半面、日中戦争以降は日本の文化的慰撫(文化工作)の一翼を担ったとの指摘をする現状での代表的論文である。また近年では、藤田賀久「同仁会と近代日中関係—人道主義と侵略の交錯」『紀要(多摩大学グローバルスタディーズ学部)』8号、2016年などがある。見城も前掲「明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向」のなかで、同仁会の役割について多少言及した。一方、中国側の研究は批判的なものがほとんどで、たとえば王萌「抗戦時期日本在中国淪陷区内的衛生工作—以同仁会為対象的考察」『近代史研究』2016年第5期などがある。
- (5) 大里浩秋「同仁会と『同仁』」(『人文学研究所報(神奈川大学)』(39号、2006年3月))は、同仁会の概説とともに、『同仁』『同仁会報』の目次を掲げ、きわめて有益である。
- (6) 前掲、丁蕾「近代日本の対中医療・文化活動—同仁会研究 ④」『日本医史学雑誌』46-4、2000年)の注記4。ここには日本の「医学校の卒業者」として46名が挙げられているが、本稿では、博士学位取得者も含めた50名を「日本留学経験者」として扱うこととする。
- (7) 前掲、見城『留学生は近代日本で何を学んだのか』3頁。
- (8) 金宝善は千葉医専卒業生のなかで、近現代中国の医学界にもっとも貢献した人物の一人と思われる。本稿で扱った4つの資料すべてに登場することは「むすびに代えて」で述べる通りである。前掲、見城『留学生は近代日本で何を学んだのか』の「第二章 医学薬学を学んだ留学生たちの帰国後の活動」では、千葉医専・医大の元留学生18名について、現代中国の評価を挙げている。そのなかでも、金宝善は質量ともに記述が多いため、5ページにわたり、その業績を紹介した(92～95頁)。併せて参考にされたい。
- (9) ちなみに、『中国医学通史 近代卷』では、「中医」についても多くの頁数を割いている。すなわち、「西医」についての叙述が249頁であるのに対し、それを上回る278頁があてがわれていた。また、「近代中医人物」には46名の「名士」が挙げられている。これすなわち、現代中国において、中医学(漢方医学)の役割がかなり重視されている証左と言えるだろう。
- (10) たとえば、広中一成『ニセチャイナー満洲・蒙疆・冀東・臨時・維新・南京』(社会評論社、2013年)を参照。

- (11) 前掲、見城『留学生は近代日本で何を学んだのか』84頁。
- (12) たとえば、千葉医専OBの方肇（方石珊）（1884～1968）は、1938年日本占領下の北京で、日中の学者が「東亜學術」の振興を図ることを目的とした「東亜文化協議会」（現代中国では、頭に「偽」を付けて、日本主導の傀儡団体と見なされている）の医学部会評議員に、侯毓汶らとともに就いたという記録が残る。ただ、その一方で「日本軍からの協力要請を拒否した」との記録もあり、新中国成立後は、中華医学会、中央防疫委員会などで要職を歴任している（前掲、見城著82、84～86頁）。